

## うわさ話とは

バス旅行などでガイドさんがよくやるゲームに「伝言ゲーム」というのがあります。通常の大型バスは補助席を入れて5列あり、縦に12席配置されています。ガイドさんが先頭の5人に伝言すべき情報を書いた紙を渡します。先頭の人はその情報を決められた時間内に頭に入れて自分の言葉で次の人に順々に伝えていくというゲームです。

このゲームは最初の人に与えた情報と最後の人を受け取った情報のちがいを確かめ合うところに楽しさがあるのです。参加者は前席から得た情報をどの人も忠実に伝えようと最大限の注意を払いながらゲームに参加するのです。しかし不思議なことに、たいていの場合、ガイドさんが提示した紙の情報と最後列の人が得た情報には食い違いがあります。そして、その食い違いが大きければ大きいほどゲームに参加した乗客たちは楽しいのです。わずか11人の口を経ただけで食い違うのです。

遠い過去のことですので、もう非難を浴びることはなかろうと思い告白します。地域の春祭りの宴席で、意図的に私は「伝言ゲーム」を企てたことがあります。在所でも雄弁家と自他ともに認める臨席の勇士に「ここだけの話しやけど」と小声で前置きして「実は、額は言えないけど暮れの年末ジャンボに当たった」と打ち明けました。金額は3,000円でしたが…。

1週間も経たないうちに、うちのばあちゃんから「おまえ、その金どうしたん？」と聞かれました。どうやら予想していた通りの結果が出ました。ばあちゃんの話によると3等(100万円)が当たったことになっているそうです。ばあちゃんには最終情報提供者へのお礼ということで3,000円差し上げました。

うわさ話に尾ひれがついて飛び交うのは世の常です。このことでうわさの対象者が一喜一憂してもしようがありません。

ただ、このうわさ話の常に中心にいる人というのもいるのです。わが在所で言えば雄弁家を自負する勇士であったり、情報通と言われる横丁のおばさんであったりするのです。決して悪気はないのですが、伝える時に無意識に自分のエッセンスを加えてしまうのです。よりインパクトのある情報に変えるのです。3,000円当たったというよりは100万円の方が情報価値が高いのです。そして、その程度の金額であれば十分起こり得ることなので罪の意識は全くありません。なぜなら、これを、「1億円当たった」としなかったことに「潜在的善意」がまだ感じられるのです。

本校の校門前を大きめの黒い猫が歩いていたら、3日後には学校に「熊が出た」という話になって返ってくるような、そんな気がする日々でもあります。